



「ダラットコーヒー」という名をご存じだろうか。ロコミなどで今、北海道から沖縄まで全国各地に愛飲者を増やしているベトナム産のコーヒーである。輸入販売を手掛けるのは、28歳の山口綾乃社長。白山市出身に率いる株式会社友越（金沢市）。「コーヒーを通じて、ベトナムと日本の懸け橋になりたい」と奔走する山口社長だが、つい1年半前までは東京のIT大手企業で将来を嘱望された社員だった。そんな女性が金沢でベトナムコーヒーを売ることになった理由。そこには、熱い理念と、それが結んだ不思議な出会いの物語が隠されていた。

ベトナムと日本を 幻のコーヒーでつなげ！

「愛」と「縁」は国境を越えて

株式会社友越 ダラットコーヒーの挑戦

未体験の味わい

湯気とともに立ちのぼる甘く鮮烈な香りと、口いっぱい広がる深く柔らかい苦味。コーヒー党であっても、「ダラットコーヒー」を飲んだ時、その未体験の味わいに驚きを感じる人は少なくない。

友越がベトナムから輸入販売をスタートして約1年。「初めて口にした瞬間、いけると思った」という山口社長の確信通り、売り込む先々でその味は認められ、金沢市内のカフェやホテル、小松空港のラウンジなどに採用された。ロコミなどでネット直販の売り上げも増加。今では有名プロ野球選手の家族にもファンがいるという。

だが、そもそも、なぜ28歳の若い女性がベトナムのコーヒーを販売することになったのか。その始まりは5年前の秋にさかのぼる。

始まりは羽田便での出会い

当時、株式会社サイバーエージェント（東京）に勤めていた山口社長は里帰りを終え、小松発羽田便に乗り込んでいた。機内で隣り合わせたのが、北陸ミサワホーム（金沢市）の林

敦会長（78）だった。

林会長は今年45周年を迎える北陸ミサワホームの創業者。一方で、北陸ベトナム友好協会を作り、多くの協賛を得て、貧困から学校に行けないベトナムの子どもたちのための里親支援を続けてきた人物でもある。

「こちらには観光で？」

「いえ、帰省で……」

何気なく始まった会話は、いつしか仕事のこと。その中で、山口社長は、林会長が企業経営においても自らの人生においても大切にしていた一つの「理念」とそれまつわる逸話に深い感銘を受けたという。

人の喜びを以って 我が喜びとする

「これこそ後世に伝えていかなければいけない考え方だと衝撃に近い感動を覚えました。そしていつかこの人の近くで、もっと学んでみたい」と

直感的に思ったんです」

山口社長の心をわしづかみにした「理念」とは、林会長が師と仰ぐ第一次南極越冬隊長の故西堀榮三郎氏

の教え「人の喜びを以って我が喜びとする」である。

これは、オイルショックのあおりを受けて北陸ミサワホームが倒産の危機にあった1974（昭和49）年ある講演会で林会長が西堀氏に初めて出会った時のエピソードに由来する。

林会長が、講師だった西堀氏に経営について相談すると、西堀氏から「組織のリーダーとして欠くべからざるものは何か分かるか」と問いかけられた。言葉に詰まっていると、西堀氏は「それは愛だ」と言い、こう投げかけた。

「人に何かをしてあげれば相手は喜ぶ。その姿を見て自分も喜ぶ。それが愛だ。こんな簡単なことが分からないようでは、経営はあきらめた方がよろしいですな」「社員一丸となって顧客を喜ばせ、それを自分の喜びとしなさい。社会に愛される会社は潰れない」

売り上げや利益にしか関心がなかった林会長は、それから営業スタイルを180度転換。既存客へのサービスを強化する手法で北陸ミサワホームの基盤を築き、その理念に基づき、ベトナムの里親支援にも乗り出した。

「機内では、西堀先生が亡くなる直前に、性格や考え方の違う者同士でも共通の目的を持って懸命にやれば事は成るという話をされたことも聞きました。こうした『異質の協力』や、『愛』に基づく経営という考え方は古いようでとても新鮮でした。羽田までの50分は本当にあつという間でした」（山口社長）

東京に戻ってからもそれらの話が頭から離れなかった山口社長は、西堀氏の著書を読み漁り、自分ができることがあればと里親支援にも参加。ベトナムの児童3〜4人が1年間学校に通うために必要な金額に相当する5万円を毎年、北陸ベトナム友好協会に寄付していた。ただ、林会長と直接連絡を取り合うことはなかったという。

突然の電話が大きな転機に

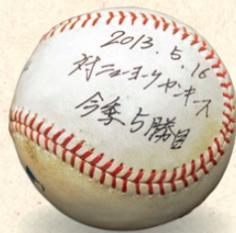
転機はそれから3年後の2011年10月16日に訪れた。それはちょうど西堀氏が隊長を務めた第一次南極越冬隊を題材にしたテレビドラマの放映初日。山口社長の携帯電話に、林会長から着信が入った。

「間違いない電話だと思いましたが、『ドラマを見なさい』というお話かとも



【株式会社友越 山口綾乃社長】

1985年白山市生まれ。二水高校から関西大学に進学。卒業後、株式会社サイバーエージェント（東京）に入社し、部署年間MVP2年連続受賞などの実績を残すも、2011年12月に退社。翌年、現職に就任。
※「友越」は11年9月に林会長（北陸ミサワホーム会長）が設立。「越」はベトナムの和名「越南」から。



岩隈投手から贈られた今季5勝目の記念ボール

友越のオフィスには林会長の手で「人脈こそ財産」と書かれた大きな紙が貼ってある。「袖ふれあった縁も活かそう」という考え方で、これを実践してきた林会長の人脈は幅広く、数十年に渡って付き合いが続く芸術家や小説家、プロ野球選手

もいる。近年では、東日本大震災の時、仙台で被災した家族の避難を手助けしたことをきっかけに、シアトルマリナーズの岩隈久志投手とも親交を温めているという。「ベトナムで感じるのも『縁』の大切さ。訪れるたび、現地の人々から北陸ベトナム友好協会が取り組んできた支援に対する感謝の言葉を頂く



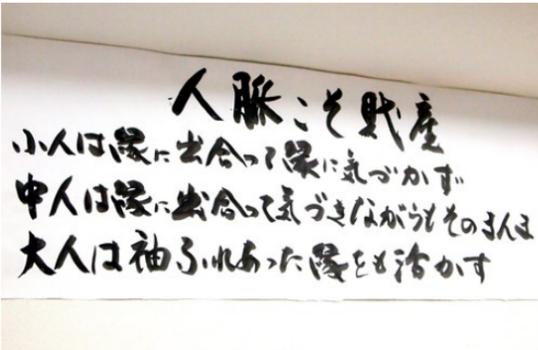
山口社長はダラットのコーヒー農園を何度も訪れている

友越、ダラットコーヒーへの問い合わせは電話076(222)2205まで。

思いから、山口社長は何度も現地に足を運び、品質管理を徹底。少しでも質の悪い豆は手作業で2回に分けて取り除き、輸入後に再度、国内で検品する。山口社長が社員とともに箱詰め作業を行うこともあるという。地元企業による食品検査では細菌や残留農薬など280項目すべてに問題がないと確認された。



今年6月、林教会長(右)は岩隈投手(左)にシアトルに招かれた



友越のオフィスに貼られた「人脈こそ財産」の標語

からです。私がかここにいるのは、日本の多くの支援者が築いた土台があつてこそ。この仕事を始めるまで『自分はやればできる』と思っていました。が、人と人の縁に支えられていると痛感しています。(山口社長)

熱意が呼び込む「縁」も

山口社長の熱意に突き動かされる人も、徐々に増えてきた。昨年6月頃に出会ったのが、現社員の喜多志津加さんだ。ちょうど事業を手伝ってくれる人を探していた時期で、友越が掲げる理念や夢を語る山口社長に、営業先の担当者が紹介してくれたのが喜多さんだった。

「林会長と山口社長の強烈な個性に魅了され、友越が夢に向かってどう進んでいくのかを近くで見たい」と



喜多志津加専務(左)と山口社長。ダラットコーヒーを扱うカフェラモーダで=金沢市香林坊2丁目

若き経済新興国ベトナムとの懸け橋になることは、いずれ日本のためになる。そう信じる山口社長は里親支援を続け、石川県内酒造メーカーとのコーヒー酒開発など、ダラットコーヒーの輸入直販からさらに一歩踏み出した企画にも乗り出している。「今後は貿易や企業支援の輪を広げていきたい」と語る山口社長。夢は膨らむばかりである。



【西堀榮三郎氏(1903-1989)】

京都市出身。京都帝大理学部化学科卒。19歳の時、京都を訪れたアインシュタイン博士の通訳を3日間務め、影響を受けたとされる。京大理学部教授在任中に第一次南極地域観測隊副隊長兼第一次越冬隊長を務める。日本生産性本部理事、日本山岳会会長、日本工業技術振興協会会長などを歴任。日本の統計的品質管理手法の先駆者であり、「雪山賛歌」の作詞者としても知られる。主な著書に「石橋を叩けば渡れない」(生産性出版)など。

掛け直してみたいです」(山口社長)しかし、出張先のベトナムにいた林会長は思いがけない用件を切り出した。「私は高齢になりつつある。もし、まだ人生の道が決まっていないうら、ベトナムで培った人脈と意志を引き継いでくれないか。」折しも、山口社長はサイバーエージェントでプロジェクトチーム責任者として新たなスタートを切ろうとしていた。突然の申し出に戸惑いながら、ふと思いついたこと。それはサイバーエージェントの入社式で同社社長の訓示にあった「迷わずベトナムへ向け」という言葉だった。「もしベトナムで新規事業をやれと言われたら、君たちはどうするか。事前勉強して1年後にベトナムに行

く社員と、即日ベトナムに飛んでがむしゃらに走り、走りながら考える社員がいたら、勝者は後者だ」という内容でした。たとえ話ではありませんが、これ思い出した時、ベトナムという国に運命を感じました。給与が下がることなど、何とも思わなかった。今こそ西堀先生の理念を引き継ぐチャンスであり、ベトナムと日本の懸け橋になることは自分にとえられたテーマで、使命だと確信したんです」

ベトナムコーヒーの輸入販売は林会長が以前から温めていた構想である。里親制度で支援してきた里子から渡されたコーヒーを日本の知人に配ったところ、各方面から高い評価が寄せられていたためだ。

を知ってもらい、それを通じてベトナムと日本の交流の輪を広げたい」との一念で選んだのが、「ダラット」の高級豆だった。「ダラット」は19世紀末にフランス人が開拓した避暑地として知られる高原の街。ここで栽培される良質な豆は欧州を中心に輸出されている。農法は無農薬・無化学肥料。鼻をくすぐる甘い香りがするのは、契約した焙煎業者が3代続く職人で、初代がフランス人から直接学んだ秘伝の技術を受け継いでいるためだ。

「より良いものを提供したい」との

【北陸ベトナム友好協会】

北陸とベトナムとの交流促進を目指し、林会長が知人に呼びかけて1995年に発足した。同年、林会長がベトナムで日本語学校を運営するホーエー氏と出会い、同国の戦後復旧が進んでいないと知ったことがきっかけ。「人の喜びを以って、我が喜びとする」の実践の場として、家庭が貧しく勉学を続けられない児童生徒らに1人当たり年額7000-12000円を贈る里親ボランティア活動を現在も続け、これまでに延べ3000人の里子が巣立ち、大学教授、医師、教師として活躍している人もいる。



北陸ミサワホーム本社屋内に設けられたベトナムコーナー=金沢市堀川町

3代続く秘伝の焙煎技術